

劉禹錫における「望洞庭」詩制作の契機について

梅 田 雅 子

はじめに

君山は、洞庭湖に浮かぶ島であり、現在の岳陽市の西一五〇キロの所にある。その名稱は、『楚辭』以来の湘君傳説に由来し、洞庭湖を代表する名勝地の一つである。この君山を詠った詩歌群（以後、「詠君山詩」と呼ぶ）の中で、とりわけ注目すべきは、李白「陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭五首」——族叔刑部侍郎曄^よ及び中書賈舍人至に陪して洞庭に遊ぶ五首」（以下、「遊洞庭」詩と略稱）第五首、と劉禹錫「望洞庭——洞庭を望む」詩であろう。

李日「遊洞庭」五首 其の五
帝子瀟湘去不還 帝子瀟湘 去りて還らず

空餘秋草洞庭閒
淡掃明湖開玉鏡
丹青畫出是君山

空餘秋草 洞庭の閒
淡く明湖を掃きて 玉鏡を開かば
丹青もて畫き出すは 是れ君山

劉禹錫「望洞庭」

洞庭を望む

湖光秋月兩相和
潭面無風鏡未磨
遙望洞庭山水翠
白銀盤裏一青螺

湖光秋月 兩つながら相い 和し
潭面風無く 鏡 未だ磨かず
遙かに望む 洞庭 山水 翠にして
白銀盤裏 一青螺

この二作品は、地方誌^{〔1〕}にて君山を説明する際、多く引用され、詠君山詩の代表作品として捉えられている。特に劉禹錫「望洞庭」詩の最終句「白銀盤裏一青螺」は、とりわけ愛稱さ

れ、詩話などに取りあげられるなどして、李白詩に並び立つほど注目されてきた。劉禹錫「望洞庭」詩が李白「遊洞庭」詩と同様に注目された要因は何處にあるのか。本稿はその要因を、劉禹錫「望洞庭」詩の最終句「白銀盤裏一青螺」の表現効果に有ると考える。さらに、この「白銀盤裏一青螺」の表現が生まれた契機に、寶庠（とうしやう）「金山寺」詩が深く関わっていると考え、「望洞庭」詩と「金山寺」詩との繼承關係についても考察を加えたい。なお文中の傍點は全て筆者によるものである。

一、劉禹錫「望洞庭」詩が注目された要因

劉禹錫「望洞庭」詩が、君山を詠い込んだ詩歌群、詠君山詩の中で、いかに李白「遊洞庭」詩と並び立ち得たのかを考える前に、まず、李白「遊洞庭」詩が注目される理由を考えてみよう。大きな要因として、以下の四點が考えられる。

A、詩歌における地名「君山」の使用の年代的早さ：李白「遊洞庭」詩は、乾元二年（七五九）の作とされている。

詠君山詩の中では、李白に先行する作品もいくつか残されている。比較的早い時期の作品としては、張説（六六七～七三〇）「送梁六自洞庭山作——梁六を送る 洞庭山自

劉禹錫における「望洞庭」詩制作の契機について（梅田）

り（し）作」が挙げられよう。なお「洞庭山」は、君山の別名でもある。

張説「送梁六自洞庭山作」

梁六を送る 洞庭山自り作る

巴陵一望洞庭秋 巴陵一望す 洞庭の秋

日見孤峰水上浮 日びに見る孤峰の水上に浮かぶを

聞道神仙不可接 聞道（きくみち）く神仙 接す可からずと

心隨湖水共悠悠 心は湖水に隨いて 共に悠悠たり

張説には他にも君山を詠った作品「岳州別梁六入朝——岳州にて梁六の入朝するに別る」：「江樹雲間斷、湘山水上來——江樹雲間に斷たれ、湘山水上より来る」もある。（湘山）も、君山の別名である。）ただ、注意すべきは、張説の作品では、君山を「洞庭山」「湘山」といった名稱で表している點である。「洞庭山」は、太湖の東西「洞庭山」を指すこともあり、また「湘山」は「湘地方の山」という意味合いでも使われ、君山そのものを指すわけではないこともある。「君山」という言葉を用いた詩歌としては、李白の作品が現存する限りで最も早いものと言える。

B、詠われるべきトピックを多く盛り込んだ點：例えば、楚辭以來の傳統のある「湘君傳說」や、やがて宋代に「瀟湘八景」の一つとして数えられるようになる「洞庭秋月」、さらに李白の作品にて多く用いられる「月と酒」の場面など、洞庭湖にまつわる有名な話題やテーマが多く盛り込まれていることが分かる。このことにより、相手に洞庭湖を簡明に紹介する、現代における名所繪はがきやガイドブックのような役割を果たすことが可能となったのではないか。このような役割を帯びることが、詠君山詩の中で、とりわけこの詩に注目が集まる理由につながっているようにも思える。

C、「君山」という言葉の効果的な配置：李白「遊洞庭」詩は、七言絶句の連作であり、「君山」という言葉は、連作の一番最後・第五首のさらに最終句に配置されている。このことにより、五首連作によって洞庭湖に關わる事物を廣く詠み込んでいくが、最終的には君山へとイメージが集約して行くという効果が指摘できよう。さらに第五首のみに着目しても、その最終句七字の内で、句末の二字に「君山」の語を用いていることから、やはり「君山」へと焦點が絞られて行く効果が見て取れる。

D、隱喩表現によるイメージの重層性：第三句、第四句に「淡掃明湖開玉鏡、丹青畫出是君山——淡く明湖を掃いて玉鏡を開かば、丹青もて畫き出したるは是れ君山」とあるように、第三句では洞庭湖を明るく澄んだ鏡に、また、最終句では風景を一幅の繪畫に見立てるといふ隱喩の手法が用いられている。隱喩とは、比喻表現の一つであり、あるものを別のものに喩える修辭法である。直喩と違って、なぜ、そのように喩えることができるのかという「根據」が明示されない點が隱喩の特徴と言える。このように、喩える際の根據が明示されないために、隱喩表現では、解釋が固定されず、多くのイメージが重なり合うことが可能となる。（補説参照）そのため、讀者により深い餘韻効果をもたらすことが期待できるのである。李白「遊洞庭」詩は、七言絶句の後半二句に隱喩表現を持つことで、さらにその餘韻の効果が高められていると考えられる。

以上の四點が、李白詩が他の詠君山詩に比べより讀者の印象に残りやすく、詠君山詩の代表となり得た要因であると指摘できよう。

それでは、次に、劉禹錫「望洞庭」詩が、如何に李白「遊洞庭」詩に並び、また時には李白詩より注目を浴びることが可能になったかを考えていきたい。

A、「君山」という地名を用いずに、「青螺」という隠喩を用いた点：李

白「遊洞庭」詩では、最終句の、さらに一番最後の表現に「是君山」という、非常に印象的な表現が用いられている。これに對して、劉禹錫「望洞庭」詩では、「君山」という地名が用いられていないために、李白詩の亞流的作品と受け取られることがなかったものと考えられる。なお、推測ではあるが、劉禹錫は意圖的に「君山」の地名を用いずに、君山を言い表す表現を模索していたのかも知れない。その背景には、李白「遊洞庭」詩への劉禹錫の對抗意識が込められているようにも思われる。

B、隠喩の徹底による餘韻の効果：劉禹錫「望洞庭」詩では、洞庭湖が鏡や白銀盤に見立てられているだけではなく、君山をも青螺に見立てた表現が用いられている。「白銀盤裏一青螺」のように、一句全體がこのような見立て、つまり「隠喩」によって表現されているのである。そして、このような隠喩が用いられている箇所が、李白「遊

劉禹錫における「望洞庭」詩制作の契機について（梅 田）

洞庭」詩同様、最終句であることも、注目される。このような隠喩表現とその用いる場所の工夫により、李白詩同様、より高い餘韻の効果を上げていると考えられる。

C、白と青との色彩の對比：この色彩の對比（＝色對）は、

李白「遊洞庭」詩には見られない表現手法である。色對は、傳統的な手法と言え、劉禹錫が考えたというものではないが、このような色對の手法をうまく用いることで、鮮烈な映像イメージを讀者に與える効果を上げていると言えよう。

D、數詞「一」を用いて「君山」を焦點化する手法：「一、青

螺」、と數を限定することで、對象となる「君山」に焦點をあて、そのことで讀者の意識を引く効果が見て取れる。また、イメージの集約化も指摘できよう。

C、Dについては、劉禹錫以前から存在する傳統的な手法である。ただ、僅か「白銀盤裏一青螺」という七字中で、四つの表現技巧が集中して用いられているという點は、注目に値する。これらのことから、最終句「白銀盤裏一青螺」の句こそが、劉禹錫が詩人としての技量をそそぎ込んで練り上げた表現であると判断できよう。また、君山に關する表現が

一句で簡明にまとまり、なおかつその表現が以上指摘したようにインパクトが有ったために、やはり李白詩同様、「名所繪はがき」のような役割を果たしたとも考えられるのである。

二、「白銀盤裏一青螺」句の發想の

契機について

以上のことから、劉禹錫「望洞庭」詩は、最終句「白銀盤裏一青螺」の表現効果によって、詠江山詩のなかでもとりわけ注目され、李白詩に並び立つ作品として後世に伝えられるに至ったと考えられる。ところが、この「望洞庭」詩の最も核となる表現とも言うべき「白銀盤裏一青螺」であるが、『全唐詩』における「螺」の用例を眺めてみると、ある興味深い事實に氣が付く。それは、山を「螺」で比喻する用例が、中唐においては、劉禹錫「望洞庭」詩を含めても僅か二例しか見出せない點である。今一つの用例は、劉禹錫より一周年上となる寶庠（七六六〜八二八 または七六七〜八二九）の「金山寺」詩である。以下に全文を挙げる。

寶庠「金山寺」

金山寺

一點青螺白浪中

一點の青螺 白浪の中

全依水府與天通	全て水府に依りて	天と通ず
晴江萬里雪飛盡	晴江萬里	雪飛び盡し
鼉背參差日氣紅	鼉背參差として	日氣紅し

詠い込まれた場所は方や洞庭湖、方や金山寺と異なるが、第一句目の「一點青螺白浪中——一點の青螺 白浪の中」という表現を見ると、劉禹錫「望洞庭」詩の「白銀盤裏一青螺」の表現と非常に似ていることが分るかと思う。兩詩の共通點を以下にまとめてみた。

A、詩形：どちらも七言絶句を用いている。

B、作品の核となる表現：「金山寺詩」が「一點青螺白浪中」、「望洞庭」の詩が「白銀盤裏一青螺」である考えられる。水中に浮かぶ山、白、青、一、山の隱喩である「螺」、という要素が全て共通していることが分かる。

C、作品の舞台設定：寶庠「金山寺」詩は、長江という大河の中の金山を描いているが、「望洞庭」詩は、洞庭湖という大きな湖の中の君山を描いている。どちらも「水面が廣々と開ける場所に浮かぶ山」を描いていることが共通している。ただ、金山寺の詩には「白浪の中」とあるように、長江の奔流という、激動する水の中の山を詠って

る。これに對して、劉禹錫は湖面を「白銀盤」と表現しているように、洞庭湖という浪の穏やかな靜寂な水の山の山、を描き出している。同じ、水面に浮かぶ山を詠み込んではいるが、この點に關しては、全く對照的であると言えよう。

活躍した時代が近い詩人に、ここまで共通した表現が並ぶと、單なる偶然とは判斷しがたい。暗合の可能性も考えられるが、「螺」自體の用例を詩歌以外から探してみても、中唐期において、「螺」が山の比喩として用いられることは稀である。そのほとんどが、螺そのものを指していたり、または「螺杯」のように器物を指す表現が中心であり、比喩的表現はほとんど見られない。當時において、山の比喩として「螺」を用いることは、暗合と言えるほど、熟した表現ではないと判斷できよう。また、『全唐詩』約四萬九千首中、一句の内で「白、青、螺、一」の四字が共通する作品は、劉禹錫「望洞庭」詩と寶庠「金山寺」詩の二作品のみであるという事實からも、兩詩に何らかの影響關係があることは、明らかだろう。

では、どちらの作品が先行したのであろうか。まず、寶庠「金山寺」詩の制作年代を、彼の經歷（年表參照）から考えて

劉禹錫における「望洞庭」詩制作の契機について（梅田）

みようから考えてみよう。寶庠は、大曆元年前後（七六六年または七六七年）の生まれとされ、劉禹錫より十四、五歳年上となる。寶庠には五人の兄弟がおり、それぞれに、詩に工（たくみ）であったとされ、兄弟五人の作品集『寶氏聯珠集』五卷が残されている。しかし、この『寶氏聯珠集』に收められている作品しか後世に傳わっておらず、その數は僅かに二十一首のみである。寶庠は、劉禹錫とも交流があり、永貞元年（八〇五）年には洞庭湖において、劉禹錫や韓愈らと詩の贈答を行っている。寶庠は、この時、武昌節度副使として岳州に滞在していたが、元和三年（八〇八）年には、浙西節度副使として潤州に赴任していたと考えられている。金山寺はこの潤州にある。寶庠「金山寺」詩は、潤州赴任期に作られたものと考えられよう。寶庠には、ほかに一首金山寺を詠った「金山寺行」という作品が残されている。この作品には「潤州金山寺、寺江心に在り」という注が付されている。その後、彼は各地を渡り歩き、最終的には婺州（現在の浙江省金華市）の刺史として、一生を終える。最晩年に、白居易に、寶庠のもとを訪れたという「宿穴寶使君莊水亭」詩があり、この制作が大和二年（八二八）とされることから、寶庠は、大和二年か翌年三年に亡くなったと考えられている。

次に劉禹錫「望洞庭」詩の制作年代であるが、長慶四年（八二四）年の秋のこととされている。寶庠が亡くなる四年程前にあたる。これらの點から、寶庠が、長慶四年から、亡くなるまでの四年間に「金山寺」詩を作ったとするよりも、彼の經歷から、元和三年（八〇八）に金山寺のある潤州にて作ったと考える方が、蓋然性が高いと言えるのではないか。つまり、劉禹錫「望洞庭」詩よりも、寶庠「金山寺」詩のほうが、先行して作られた可能性が高いと判断できる。恐らく、劉禹錫は寶庠「金山寺」詩を何らかのルートで目にすることができたのだろう。劉禹錫と寶庠の交流を示す直接の資料は、あまり多くは残されていない。しかし、寶庠の兄・常は、劉禹錫が朗州司馬であった時の朗州刺史にあたり、多くの交往詩が残されている。寶庠から直接「金山寺」詩をおくられてはいなくとも、兄・寶常から劉禹錫へ示された可能性も充分考えられる。以上の點を踏まえると、劉禹錫「望洞庭」詩の「白銀盤裏一青螺」という表現は、劉禹錫の一からのオリジナルであると思えず、寶庠「金山寺」詩の表現を發想上の契機として生み出されたものであった、と考えられるのである。

しかし、劉禹錫は、單に自分の作品に取り入れただけではなく、さらにその表現の効果をうまく發揮させるために、様々

な工夫を凝らしていることも指摘できる。具體的に言えば、核となる表現が配置された場所の違いである。「金山寺」詩では、該當個所が第一句（冒頭）であるのに對して、「望洞庭」詩では、該當個所は第四句（最終句）となっている。劉禹錫「望洞庭」詩は、作品の核となる表現を一番最後に持ってくることで、より、讀者に強烈な印象を與えることを狙ったのかもしれない。そのうえ、「望洞庭」詩は、最終句の一句全てが隱喩で表現されていることも注目できよう。先にも述べたように、隱喩表現では解釋が固定されず、多くのイメージが重なり合うことが可能となる。さらに、劉禹錫「望洞庭」詩では、最終句に隱喩表現を持つてくることで、より一層、讀者に餘韻を與えることに成功していると言えるのではなからうか。この工夫の有無が、結局は、詩話類が劉禹錫「望洞庭」詩に注目し、現在に至るまで名作として傳えられていることの、一つの要因となっていると考えられる。

逆に、寶庠「金山寺」詩が、あまり注目されなかった要因を、補足的ではあるが考えてみよう。まず、詠み込まれている場所が金山寺であることから、君山を詠った劉禹錫の作品と、關連させて取り上げられることが少なかった可能性が指摘できる。また、晩唐・雍陶「題君山」詩の「一螺青黛鏡中

心——一螺の青黛 鏡の中心」という表現が、寶庠「金山寺」詩の表現に類似していたために、逆に「金山寺」詩も、あまり検討されないまま、劉禹錫の表現を繼承する後世の作品群の一つと見なされてしまった可能性も考えられよう。そのことによって、結果的に、今までの論説の中で、寶庠「金山寺」詩と劉禹錫「望洞庭」詩との關連が論じられなかったことへ、繋がっているのではなからうか。

おわりに

劉禹錫「望洞庭」詩は、最終句「白銀盤裏一青螺」の表現の秀逸さが指摘できる。しかし、その表現は、寶庠「金山寺」詩の第一句「一點青螺白浪中」が發想上の契機となったと考えられる。「金山寺」詩の表現を「轉化」して作られた劉禹錫の「白銀盤裏一青螺」の表現は、結果として李白「遊洞庭」詩との差別化に成功し、詠江山詩の中でも、とりわけ注目される作品となり得たのだと言えよう。なお、いまや資料が無く、類推の域を出ないが、文人達の詩作における對抗意識などから考えると、劉禹錫「望洞庭」詩は、李白詩を乗り越えようとしていたとともに、寶庠「金山寺」詩の「一點青螺白浪中」という表現も、乗り越えようという意圖のもと作られたよう

劉禹錫における「望洞庭」詩制作の契機について（梅田）

にも思われる。

注

- (1) 南宋『輿地紀勝』卷六九は、「君山詩」として、李白「遊洞庭」、杜甫「寄薛三郎中」、雍陶「題君山」、劉禹錫「洞庭秋月」、同「君山懷古」、同「望洞庭」等々を載せる。南宋『方輿勝覽』卷二九は劉禹錫「望洞庭」、黃庭堅「雨中登岳陽樓望君山」を載せる。「明一統志」卷六二は「李白遊洞庭」、劉禹錫「望洞庭」を載せる。『隆慶岳州府誌』卷七は「巴陵之山、其最著者曰君山。」と記し、李白「遊洞庭」詩、劉禹錫「望洞庭」詩、雍陶「題君山」、劉子澄詩、方干「題君山」(『全唐詩』卷六五三)、蘇軾詩、元・虞伯生詩、を載せる。

(2) 宋・葛立方『韻語陽秋』卷二

詩家有換骨法、謂用古人意而點化之、使加工也。李白詩云：「白髮三千丈、緣愁似箇長。」黃公點化之、則云：「綵成白髮三千丈。」劉禹錫云：「遙望洞庭湖水面、白銀盤裏一青螺。」山谷點化之、則云：「可惜不當湖水面、銀山堆裏看青山。」……學詩者不可不知此。

※同じく黃庭堅との關連を指摘するものとして、『詞話總龜』卷一三、『詩人玉屑』卷八等があり、同様の内容がパターン化され繼承されていることが分かる。

宋・計有功『唐詩紀事・雍陶』卷五六

劉夢得「洞庭詩」云「湘江秋月兩相和、潭面無風鏡未磨。遙

中國文學研究 第二十七期

望洞庭山翠小、白銀盤裏一青螺。陶亦吟云「煙波不動影沉沉、碧色全無翠色深。疑是水仙梳洗處、一螺青黛鏡中心」。

※劉禹錫以後の作品における繼承關係への話題が多い。

(3) 乾元二年の作：賈至は乾元二年（七五九）三月に汝州を出奔し、岳州司馬に貶せられている。傅璇琮『唐代詩人叢考』「賈至考」中華書局 一九八〇年参照

(4) 張說「送梁六自洞庭山作」『全唐詩』卷八九

(5) 『全唐詩』卷八八 五言排律・全十八句中第五、六句

(6) 包融「登翹頭山題儼公石壁」：「青爲洞庭山、白是太湖水。」

『全唐詩』卷一一四

(7) 郎士元「夜泊湘江」：「湘山木落洞庭波、湘水連雲秋雁多。」

『全唐詩』卷二四八

(8) 名所繪はがきは、ある名勝地の見所となる部分を中心に提示して、相手にその名勝地のポイントを簡明に説明することに役立っている。名勝地が詠み込まれた詩歌にも、繪はがきのように、その地の見所を相手に簡明に伝える働きがあると考える。

佐藤健二「風景をメディア論から問う——繪はがきを材料にして」（『國際交流』第八二號 一九九九年）など参照

(9) 劉禹錫の李白への對抗意識：劉禹錫「望洞庭」詩は、李白の「遊洞庭」詩と同じ七言絶句によって作られている、詠み込まれている題材も共通している、一番最後に「君山」を表す言葉が配置している、などの点から、李白への對抗意識があった可能性が考えられる。しかし、劉禹錫は、同時代の白居易・元稹・韓愈のように、李白・杜甫に關して活發な議論をすることなく、それどころか、ほとんどコメントを残していない。そのため、李白への對抗意識に關する直接的な證據は見いだすことができない。ただ、①李白「改九子山爲九華山聯句并序」と劉禹錫「九華山歌」との發想の類似（寺尾剛「李白と九華山の『詩跡』化について」「愛知淑徳大學國語國文」第二〇號 一九九七年、に詳しい。）②王逸「楚辭九歌序」と劉禹錫「竹枝詞引」との發想の類似、など、はっきりとは明言してはいないが、先行作品との影響關係が疑われる作品がいくつか指摘できる。劉禹錫の前人の作品に對する態度の傾向を考えると、李白への對抗意識も、明言はされていないが、その可能性は否定しきれない。本稿ではひとまずは結論を避けるが、劉禹錫における前人の作品への態度とその傾向については、今後検討課題としたい。

(10) 唐代までの詩歌以外の「螺」の用例：臺灣中央研究院・漢籍電子文獻「瀚典全文檢索系統」、『文淵閣四庫全書電子版』全文檢索などを參考にする。

(11) 龍泉二號全文檢索系統『全唐詩』の&檢索による。

(12) 寶庫關連年表

？：國司主簿となる。

永貞元年（805）：武昌節度副使。冬：韓愈、劉禹錫らと詩を贈り合う。

元和三年（808）：浙西節度副使（潤州に置かれる）↓「金山寺」・「金山行」を制作か。

元和五、七年（810、812）頃：澤州（山西省晉城市）刺史
元和八年、一一年頃（813、816）：宣歙團練副使

元和一一一四年頃（816～819）：奉天縣（陝西省乾縣）令
？：東都留守判官

長慶二年（822）：登州（山東省蓬萊縣）刺史

？：汝州（河南省臨汝縣）防禦判官

長慶四年（824）：劉禹錫「望洞庭」詩

寶曆元年（825）：信州（江西省上饒縣）刺史

大和二年（828）：婺州（浙江省金華市）刺史：この年または翌

年頃に官舎にて死去。六十三歳

※參考資料：郁賢皓『唐史刺史考全編』（安徽大學出版 二〇〇〇年一月） 傅璇琮『唐五代文學編年史』（遼海出版社 一九九八年二月）

※傳記資料

『舊唐書』卷一五五 寶庠傳

牟弟庠，字胄卿，釋褐國子主簿。吏部侍郎韓皋出鎮武昌，辟爲推官。皋移鎮浙西，奏庠爲節度副使、殿中侍御史、遷澤州刺史。又爲宣歙副使、除奉天令、登州刺史、東都留守判官、歷信、婺三州刺史。卒年六十三。子繇，載。

『新唐書』卷一七五 寶羣傳

兄常、牟、弟庠、鞏，皆爲郎、工詞章，爲『聯珠集』行於時，義取昆弟若五星然。

『新唐書』卷一七五 寶庠傳

庠字胄卿，終婺州刺史。

『新唐書』卷六〇 藝文志

劉禹錫における「望洞庭」詩制作の契機について（梅田）

寶氏聯珠集五卷 寶羣、常、牟、庠、鞏。

褚藏言「寶庠傳」『全唐文』卷七六一

府君諱庠，字胄卿。家世所傳，載於首序。府君初應進士，感於知己一言，遂從事於商洛，授國士主簿，未幾而罷。後吏部侍郎韓公出鎮武昌，美公之才，辟爲節度副使，遷監察御史。俄而昌黎却入，公至鞏下，遷澤州刺史。秩滿，時光祿卿范公由吳郡領宛陵，奏公試太子中允兼侍御史，爲團練副使，加章服。府罷，除奉天縣令。遷登州刺史。昌黎公留守東都，又奏授公爲汝州坊禦判官，改檢校戶部員外郎兼侍御史。後，遷信州刺史。三載轉婺州，亦既二載，遭疾告終東陽之官舍。享年六十有三。公天授偶儻，氣在物表，一言而合，期於歲寒，爲五字詩，頗得其妙。嗣子匡餘，疾沒世。次曰繇，晉州司法。次曰載，國子監直講。皆克荷素風，聿修官業。詩筆散落，編錄未遑。

(13)

韓愈「岳陽樓別寶司直」（寶庠時以武昌幕權岳州，愈移江陵法曹，道出岳陽樓作）「寶庠「酬韓愈侍郎登岳陽樓見贈」（時余權知岳州事）「劉禹錫「韓十八侍御見示岳陽樓別寶司直詩因令屬和重以自述故足成六十二韻」

(14)

寶庠「金山行」『全唐詩』卷二七二

(15)

「望洞庭」詩製作年代には、次の三説が有る。

① 朗州司馬赴任の途中：永貞元年（八〇五）冬

・ 中國古典文學普及讀物『唐詩選注』北京出版社 一九七八年

八年

・ 吳汝煜・李穎生『劉禹錫詩文選注』上海古籍出版社 一

中國文學研究 第二十七期

九八七年

② 朗州謫居時：元和元年（八〇六）～元和九年（八一五）冬

・劉禹錫詩文選注組『劉禹錫詩文選注』江蘇人民出版社

一九八〇年

・高志忠『劉禹錫詩詞譯釋』黑龍江人民出版社 一九八二年

※赴任時は、冬に當たるので、『唐詩選注』の考えを取らず、朗州謫居時とする。

※なお、元和十年（八一五）年春には長安に至る。

・梁守中選注『劉禹錫詩選』（歷代詩人選集）三聯書店香港分店 一九八六年

③ 夔州刺史から和州刺史への轉任時：長慶四年（八二四）八月

※多くが、劉禹錫「歷陽書事七十韻」の序文に「長慶四年八月、豫自夔州轉歷陽、浮岷山、觀洞庭。」とある事に基づいている。

楊羅生「劉禹錫三首洞庭詩作繫年考」（『求索』一九八八年第四期）

・瞿蛻園『劉禹錫箋證』上海古籍出版社 一九八九年

・吳汝煜『劉禹錫選集』齊魯書社 一九八九年

・蔣維崧『劉禹錫詩集編年箋注』山東大學出版社 一九九七年※「禹錫一生、五過洞庭、唯此次在秋天。」

・傅璇琮『唐五代文學編年史』遼海出版社 一九九八年

・龜山朗『風呂で讀む續唐詩選』世界思想社 一九九八年

・『漢詩の事典』所收植木久行「君山」項 大修館書店 一九九九年※確定は避ける。

★なお、楊帆に「劉禹錫《望洞庭》《洞庭秋月行》詩繫年考」と題する同名の論文が二篇あるが（『岳陽師專學報』一九八三年第三期、一九八六年第四期）、未見である。

(16)

劉禹錫と寶兄弟（群、常、牟、庠、肇）との交往
劉禹錫↓寶群

「和寶中丞晚入容江作」

「爲容州寶中丞謝上表」注：羣、時在朗州相逢、因以見託。

「答容州寶中丞書」

劉禹錫↓寶常

「朗州寶員外見示與澧州元郎中郡齋贈答長句二篇因以繼和」

「寶朗州員外使君見示與澧州元郎中早秋贈答命同作」

「夔州寶員外使君見示悼妓詩顧餘嘗識之因作」

「寶夔州見寄寒食日憶故姬小紅吹笙因和之」

「酬寶員外使君感食日途次松滋渡先寄示四韻」

「酬寶員外郡齋宴客偶命柘枝韻見寄兼呈張十一院長元九侍御」

「謝寶員外旬休早涼見示詩」

寶常↓劉禹錫

「之任武陵寒食日途次松滋先寄劉員外禹錫」

劉禹錫↓寶羣

「秋日題寶員外崇德里新居」注：寶時判度支案

※參考：吳汝煜『唐五代人交往詩索引』上海古籍出版社 一九九三年

- (17) 雍陶「題君山」(《全唐詩》卷五一八)
 (18) 雍陶「題君山」や、黃庭堅「雨中登岳陽樓望君山」など。劉禹錫詩を合わせたこの三作品は、セットで挙げられることが多い。※『詞林廣記』卷五など。
 (19) 「望洞庭」詩は、詩話の類にも取り上げられるだけではなく、劉禹錫の詩選注にも多く取り上げられて、多くの注目を浴びてきたと言える。しかし、議論の中心は、「青螺」の解釋であり、寶庠「金山寺」詩との關連を指摘した記述は載せられていない。

補説：劉禹錫「望洞庭」詩の主な注釋書類と「青螺」の解釋(二〇〇一年三月に行われた第六回「劉禹錫読書會」にて配布された許永健氏の資料をもとに、補足を加えた。)

ア：卷き貝↓「盤」大皿」上の卷き貝。食卓に關する緣語。

- ① 高志忠『劉禹錫詩詞譯釋』黑龍江人民出版社 一九八二年
 ② 蘆荻・朱帆『劉禹錫及其作品』時代文藝出版社 一九八五年
 ③ 梁守中『劉禹錫詩選』(中國歷代詩人選集) 三聯書店香港分店 一九八六年
 ④ 目加田誠『漢詩日曆』時事通信社 一九八八年
 ⑤ 王元明『劉禹錫詩文賞析集』巴蜀書社 一九八九年
 ⑥ 石川忠久『漢詩を読む 秋の詩100選』NHK出版 一九九六年
 ⑦ 蔣維松『劉禹錫詩集編年箋注』山東大學出版社 一九九七年

劉禹錫における「望洞庭」詩制作の契機について(梅田)

- ⑧ 龜山朗『風呂で讀む續唐詩選』世界思想社 一九九八年
 ⑨ 『漢詩の事典』所收植木久行「君山」項 大修館書店 一九九九年※ウ案も含める

イ：酒杯(螺杯)↓「盤」大皿」上の螺杯。宴席に關する緣語。

- ⑩ 劉禹錫詩文選注組『劉禹錫詩文選注』江蘇人民出版社 一九八〇年

- ⑪ 吳汝煜・李穎生『劉禹錫詩文選注』上海古籍出版社 一九八七年

ウ：卷き貝のような卷き髪(螺髻)↓「盤」鏡」と女性の卷き髪。二重の比喩。女性・化粧に關する緣語。

- ⑫ 吳汝煜『劉禹錫選集』齊魯書社 一九八九年